

➤ 16日 金曜

伝道者の書



5:1 神の宮へ行くときは、自分の足に気を付けよ。近くに行って聞くことは、愚かな者たちがいけにえを献げるのにまさる。彼らは自分たちが悪を行っていることを知らないからだ。

5:2 神の前では、軽々しく心焦ってことばを出すな。神は天におられ、あなたは地にいるからだ。だから、ことばを少なくせよ。

5:3 仕事が多ければ夢を見、ことばが多ければ愚かな者の声となる。

5:4 神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。愚かな者は喜ばれない。誓ったことは果たせ。

5:5 誓って果たさないよりは、誓わないほうがよい。

5:6 あなたの口が、あなた自身を罪に陥らせないようにせよ。使者の前で「あれは過失だ」と言ってはならない。神が、あなたの言うことを聞いて怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてもよいだろうか。

5:7 夢が多く、ことばの多いところには空しさがある。ただ、神を恐れよ。

5:8 ある州で、貧しい者が虐げられ、権利と正義が踏みにじられているのを見ても、そのことに驚いてはならない。その上役には、それを見張るもう一人の上役がいて、彼らよりももっと身分が高い者たちもいるからだ。

5:9 国にとっての何にもまさる利益は、農地が耕されるようにする王がいることである。

著者（伝道者）は信じない者に対して、3つの視点から論じて、神の存在を論証しようとしています。その視点とは、神はないという視点、神は存在する

という視点、そして両者の中間のような神を暗示するものがあるという視点です。端的に言うと、無神論、有神論、そして自然神学的神論です。

（自然神学的神論とはローマ書 1:20 にあるように被造物から神の存在を認めるといふものです。）

ここまで無神論と自然神学的神論を論じてきた伝道者は、ここで「神の宮に行くときは」と、突然のようにして有神論を展開します。突然のようですが、私たち人間が神と出会うときは、人間の経験や常識を超えるのですから、多くは突然です。私たちが伝道するときも、流れの中で違和感がないようにとばかり考えていたら、いつまでたっても福音は語れないものです。伝道は神様の聖霊にたよって、突然のようになることも考慮しておきましょう。

「神に誓願を立てるとき」というように、人場もともと持っている創造主への思いを、ここでは呼び起こすことが期待されています。その上で、神が造った世界に生きる倫理を語ります。すなわち誓いや言い訳についてです。

このように、人は神を信じるときの前後には、人間の視点に立ったり、神の視点に立ったりしながら、最後には神様を受け入れるのです。

私たちは自分自身が神の前に出るときや誓いのときの誠実さを表しましょう。そして神様を知らない人々に、創造主の倫理に気づかせつつ、伝道しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

